

ための委員会の委員長としても、忙しい毎日である。

日本にのめりこんでいるとさえいわれる程の、マレー氏の日本観と日本人にたいする親愛感、日本歴史と古美術にたいする造詣のみならず、実は古武道の修練からもたらされたといつてよい。BC州の剣道協会の会長を長年つとめ、カナダ剣道協会の役員としても活躍、さらに柔道の有段者であり、そのうえ弓道にも詳しい。まさに日本人顔負けなのである。あまりにもいそがしいマレー氏の毎日を見て、周囲の友人達はハラハラしどろしどろだが本人は、この数年来急にふえてきた

C・W・ニコル

捕鯨小説に取組む優しい冒険家

矢澤 高太郎

冒険家という言葉は、今や死語に近い。だが、小説家で野生料理の名人、C・W・ニコルさんは紛れもなく、真正正銘の冒険家といえる。

北極から南極、アフリカからヒマラヤへと、世界を股にかけた冒険生活二十余年。「自然と人間の調和」を求めて生きる、たくましく、優しい野生人である。

清々しい秋風が渡る北信濃の黒姫高原。長野県上水内郡信濃町字柏原。国鉄信越線黒姫駅から黒姫山へ向かって北東へ約三キロ。カラマツの疎林の中に、モダンな赤い屋根の民家が見えてくる。これがニコルさんの住まいである。

銀髪を気にしながらではあるが、仕事に釣りに、そして日本とカナダの友好のために走り回っている。

「このあいだバンクーバー空港に立っていたら、日本の子ども達が走り寄ってきたんだ。おれをとり囲んでね……アンクル・サーモン、ミスター・マレー？」と聞くんだった。泣けたね。カナダ太平洋航空につとめていて、こんなにうれしかった事はなかったね。」

両国のために、そして太平洋のサケのために、大いに活躍の期待される熟年中期の素敵なオジサマなのである。

(北海道大学助教授)

「そう、ボクは北極人。冒険こそが人生のすべてさ」

身長一八〇センチ、体重八十七キロの堂々たる体軀。精悍な顔をほころばせ、巧みな日本語で語るその半生は、限りないドラマに満ちている。

一九四〇年、ウェールズ生まれ。少年時代はイングランドの緑したたる大地で、自然を師とし、友として育った。

長い冒険の人生の第一歩は、ハイススクール時代に始まる。カナダ北極圏へ生物学の研究に行く恩師に、家出をして同行。初めて北極の地に立った。十七歳の時だった。

「我々より体の暖かいアザラシが、冬の北極の水の下で暮らしている。ホントに感動したよ」

三年後、カナダへ移住した。もちろん、カナダの大自然に憧れていたことだった。

ここでは環境庁の技官となり、同国北部の漁業問題や自然と野生動物の保護の分野で活躍した。専門は海生哺乳動物の研究。そのために北極へ行くこと十数回。

イヌイット(エスキモー)と長期の共同生活を体験し、エスキモー語の達人にもなった。

さらに、一九六七年から二年間はエチオピアへ。獣区管理官として国立山岳公園の開設に従事した。この間、ライフルでゲリラや山賊と渡りあうこと数知れず、左腕には今も大きなナイフの傷跡が残っている。

日本に関心を持ったのは、少年時、柔道に親しんだのがきっかけだった。一九六二年に、空手の修行のため初来日。日本の捕鯨船に乗って、南氷洋へは二回、足を運んでいる。さらに、七五年の沖縄海洋博ではカナダ館の副館長に。ここでVIP専門の通訳をしていた真理子さんと知りあい、八〇年秋、黒姫山麓にスイートホームを構えた。

だが、このニコルさん。冒険家の面だけ強調されるのはあまり好きでないようだ。「ボクはホントは作家として認めてもらいたんだけどね」と主張する。小説家としての処女作は、四年前に角川書店から刊行された『ティキシイ』。神秘的な北極を舞台に、一人の若者の魂の

遍歴を感性豊かに描いたものだ。

だが、その名を一躍高めたのは、一昨年春、同書店から出版された『冒険家の食卓』だった。ウェールズ、フランス、カナダ、エチオピア、北極、南極と、世界各地への冒険行の際に作った自慢の料



自然と共に暮らすニコル夫妻

理を、それぞれの土地の人々との心の触れあいを通じてユーモラスに描いた本である。それも単なる体験談でなく、「自然とのつき合い」を基礎にすえた見事な自然論にまで高められており、大きな反響を呼んだ。

「料理というのは、その土地の人間と同じように作って食べるのが最もおいしいね。一緒に同じ物を食べるといことは、相手を信用するということでしょう。親しさや信頼と感謝を込めて、どんな民族とも愉快地食べたよ。『イタダキマス』は最高のあいさつさ」

北極グマのロースト、クジラのスシ、ハリネズミの蒸し焼きにネコのミートスパゲティ……。つまみ食い専門の相手に